

バレンタインエピソード

小坂好文

ドキドキキッ、ハラハラ！

「この行方知っているのはチヨコだけか」

「こんな初恋の熱い思いと思わず吹き出す健気なおかしさを織り交ぜな

がら、このストーリーは

足早に進んでいきます。

読後に爽快感を感じていただければ幸いです。

その一

オレは哲哉。自分で言うのも何だが、この伊勢川中学校じゃあちょっとした有名人。

「なぜか？」って。

そんなこと本人の口から言うのもなあー、ウヘヘ、照れるぜ。まあ、この後を読めばわかるってことよ。

ところで、オレたちあとわずかで伊勢川中学校を卒業するんだ。ひと言で言やあ、ちょっと生意気な十五歳ってところかな。

今日は、こんなオレのとってもいかす初恋の話を聞いてくれ。

そう、あの日は朝日がまぶしくって、もう春がそこまでやってきたのかと、心躍る気分させるそんな始まりだった。どういっわけか悲話、いや秘話の始まりは、いつもこうなんだ。

朝、いつものように家を出ると、真向かいに住むゆき子とバッタリ出会った。彼女は、はっきり言っ
て美人。それにあのキラキラ輝く美しい目で見つめられるとだれもが動揺してしまう。ただ、時として影のある表情をすることがあるんだ。だから、ちょっと近寄りがたいとみんなは言っている。

実はそんな彼女が、オレの初恋の人。オレたちは幼馴染だから、気楽に話もできるし、彼女のことも小さい頃からよく知っている。

たとえば、おへその右斜め下には、盲腸の傷跡がわずかに残っていると。何といっても一緒に
お風呂に入ったことだってある。こんな話をみんなの前ですると、ゆき子はとっても嫌がるんだ。
そして、

「デリカシーがない。そんなヤツは女の子にもてないぞ」
と、決まり文句を言う。

そこで、オレはこう言い返す。

「まあ、オレとお前の仲じゃないか!」と。

すると、カンカンになって怒る。どうしてだろう?

オレは、こう分析した。

『ゆき子はオレのことが好きなんだ。ウへへッ!』とね。

これがとんでもない誤解であり、数時間後には、それが歴然とする運命にあることを、あのときのオレはまったく知らないまま、気楽にあいさつを交わした。

「おはよう」とゆき子。

「おっはよー」とオレ。

互いにいつも通りだ。でも、何か心に引っかかるものを直感した。そこで、よくゆき子を観察してみると、シャレた紙袋を持っていることに気付いた。

「それ何？」

「ハハ、ひみづ」

「ふーん、怪しいな」

と目を細めて、横目でゆき子の顔を見たとき、オレの頭の中に稲妻のような衝撃が走った。そして、つい口から

「今日はバレンタインデーか」

というひとり言とも取れる言葉がもれた。すると、すかさず

「まさか、忘れてたとか」

と、鋭い指摘がゆき子の口から発せられた。オレは固まった。言葉が出ない。それでも、何とか足を速めながら、

「オレ、きょう日直だったの思い出したから、さき行くわ」

と言い残し、駆け出した。

息が切れ始めたオレは、ファミリーマートの角を曲がったところで歩き出した。と同時に、先ほどゆき子にしゃべった言葉を頭に思い浮かべた。そして、苦笑い。

「オレって、いつも口直だけじゃなく、掃除だってさぼってるじゃないか。バレバレのうそだったな。まあ、いいか。うーん、けどあの紙袋の中身は絶対チョコだな。まあ、プレゼントする本人に中身を聞かれたんじゃ秘密と答えるしかねーか。ウシシ！」

こんなことをブツブツ言いながら登校するひとときは最高だった。

その二

私の名前は、ゆき子。

「エヘン、田所ゆき子です」

隣に住む哲哉とは幼なじみ。いきなりですが、彼の魅力は、あの行動力です。思い立ったら、まっしぐらなんです。だから、たまにじゃなくて、ときどきでもないな。そうそう、いつも失敗をするんです。

それに、彼はちよっぴり出しゃばりでおっちょこちよい。その上、デリカシーに欠け、すぐに調子に乗ってしまうんです。

だから、よあーく

「盲腸がどうの　…っ」「とか、

「お風呂がどうの　×…っ」「とか言っんです。もう意味不明！

それから、カッコウつけたがりの、えーと…？

あら、やだっ！どうして、哲哉のいけないところは、こんなにスラスラ出てきてしまうのかしら。ほめよつと思ってたのに。

でも、哲哉は決して悪い子じゃないですよ。むしろ気のいい人間だと思います。

「どうしてか？」って。

それは、哲哉のことを昔から知ってる私が太鼓判を押すぐらいですから。フッフ！

えっ、

「彼の良さ？」ですか。

ウーン、あるんですよ。ちょっと待ってくださいね……。

そう、私にはないあっけらかんとしたところかな。私って、どちらかというと何事もきちんとして

いないとイヤなんです。反面、人の言ったことで、すぐにくよくよしたり、悩んだりするんです。

だけど、哲哉はぜんぜん！だから、ときどき友達のことと相談したりすると、明快な答えを教え

てくれるんです。そのときは、

「なーんだ、こんな単純なことと悩んでいたのか」

と、自分にあきれるくらい心がスーと軽くなったりするんです。そうそう、これって、すごい良さで

すよね。ハイ！

他にも、カンが鋭いとか。まさに野性的ですね。あっ、これは良さかな……？

今日も、私が紙袋を持っていたら、中身をズバリ当てましたから。渡す相手はまったくの見当違い

でしたが……。

とにかく、悪ぶっていますが、気のやさしい人なんです。

その三

「さてっ、と…」

例のチヨコがいつやってくるか首を長くして待っていたが、三時間目の放課になっても、ゆき子からは全然声がかからない。しびれを切らしたオレは、四時間目の授業が終わったところで、ゆき子の教室へ行ってみた。

クラスのみんなは、ちょうどランチルームへ移動したらしく、ほとんど人はいなかった。ところが、ゆき子の教室には四人の女子に囲まれて、オレの大嫌いなヤツがいた。勉強ができて、運動が得意で、クラスの委員長というヤツだ。彼とゆき子の姿を発見した途端、またしてもオレは固まってしまった。

「ヤバイ！」

心の警鐘は鳴り響いているが、体は金しばりに合い、まったく自由がきかない。そんなオレが、ガラス越しに見ているとも知らず、女子たちはヤツにチヨコを渡していた。

だが、どついうわけかヤツはチヨコを受け取らない。そうだ、ヤツは堅物なのだ。

そんな中、ゆき子がヤツにチヨコを…。オレのからだ熱くなった。その場から逃げ出したい心境なのに、足は動かない。場面はスローモーションのように展開していく。

「おおオー」

ヤツがチヨコの箱を押し返す。

それを目の当たりにして、

「そつだ。いいぞ！あんたはエライ」

と、心で叫んだ。すると、わけもなく嬉しさがこみ上げてきた。

ゆき子は突っ返されたチヨコの包みから手紙だけを抜き取り、ヤツに渡した。だが、ヤツは受け取らない。ゆき子は懇願するような表情で、もう一度渡した。

すると、驚くことにヤツは手紙を持ったゆき子の手を払い除けた。

一瞬、

「あっ」

というゆき子の声が聞こえたような気がした。手紙は宙を舞って、教室の隅のゴミ箱にポトリと落ちた。

オレは、頭の中が真っ白になった。気付くと教室の中に。

みんなの視線がオレに注がれていた。何か言わなきゃと思いつつ、ついこんな一言が出た。

「ひどいことするなあ。人の気持ちかわからねーヤツは、ろくな大人になれねーぞ。まあ、この手紙

はオレが代わりにもらっと」

そして、捨てられた手紙のほこりを払い、ポケットに入れた。

そのときになって、あっけに取られていた女子たちがわめき出した。

「やばい！哲哉に見られた」

「みんなに尾ひれを付けてチクられる」

「ゆき子の手紙どうすんのよ？」

「また、さらし者にする気でしょ。」

彼女たちは、ヤツにふられた負のエネルギーを発散するかのように矛先をオレに向け、機関銃のごとくわめき立てる。負けじと言い返す。

「オレはよう、こいつみたいに頭も良くねえし、スポーツだって得意じゃねえ。時々いたずらもして、みんなをからかったりする。だけど、人の好意はわかる人間だぜ」

「ここでヤツが一言。」

「ぼくだってわかるよ。ただ、特定の子からチョコをもらうのは、ぼくのポリシーに反するのよ。」

「ガクッ」

これを聞いて、オレはどっちらけ気分になり、

「何も言うことはねえよ」

と、言い捨てて、その教室を後にした。

その四

委員長の黒田 くんチョコを渡す場面を哲哉に見られてたこと、ショックでした。私、哲哉のことうっかり忘れてました。

まるで、授業参観の日に大切な用意を忘れ、頭の中が真っ白になったような気分です。

結局、私って黒田くんチョコと手紙を渡すことで、何となく心がウキウキしてたのかもしれないぜ
ん。

これが恋する相手なら、自分で自分を説き伏せられるけど、黒田くんはちょっと違うんです。

もともと、彼は私の大好きだった兄さんに笑顔が似てるんです。どんな時でもあせらず微笑みながら語りかける、そのしぐさが兄を思い起こさせるの。彼と話していると、兄さんとの楽しいひとときを思い出します。

兄さんは、人一倍の努力家だったけど、人の前ではいつもすずしい顔をしてました。黒田くんもそうかなあー？

ふと、そんなこと思ってたら、有里 たちにごう誘われたの。

「バレンタイン、最後の思い出にいー、だれでもいいから告ろ！」ってね。

それで、私の気持ちを有里たちの仲良しグループに話したら、みんなも黒田くんにチョコを渡すつもりだったって言うの。

「だって、黒ちゃんはカッコいいし、頼りになるもん」って、口々に言うから。

こんなことってあるのかなと不思議な気分だったけど、確かに心強さは感じました。

だから、この親友たちの後押しが、私を大胆にしたのかもしれないわ。

そういえば、小さいころからおばあちゃんが、

「思慮深くしなさい」って言った。

「思慮とは、心に貯めこむ宝物。あなたを輝かせるわ」

そんなことを教えてもらったけど、どうすると心に貯めこめるかは忘れちゃったみたい。これだ

から、後悔ばかりしてるのね。

今さら悔いても始まらないけど、私っておバカさん。

今朝、哲哉といっしょに登校するとき、彼は「ヨ」をもらえるものと勘違いしてたみたかったから…。後で上手に話をしなきゃと思っていたのに。

『フウ、運命って皮肉なものね』

黒田くんが、お話友たちになってくれればという私の想いを誤解していることも気になるけど、それ以上に哲哉のことがとつても気がかり。ひょっとしたら、私、哲哉のことすごく傷つけてしまったのかも？

「んげんげん」

こんなとき、いつもなら哲哉に相談するんだけど…。こればかりは無理ね。

心のどこかで声がする。

「そんなに悩むことなの？」って。

そうね、正直に言うって、わたし、哲哉に嫌われるのが怖い。だって、いつも身近にいた兄が突然いなくなって、気の小さな私は、臆病になっているのかもしれないわ。

だから、哲哉を…。

その五

ランチルームでは、いつものいたずら仲間がオレを待っていた。

「どうだった？」

「ゆき子から「ヨ」もらったんだろ」

と、口々に聞く。無然とした表情で、

「そんなのねえよ」と、答える。

それ以後、事情はわからずともオレのブルーな気分を察して、仲間はずっとしておいてくれた。この日は、オレの大好きなビーフストロガノフだったが、ちっとも美味しくはなかった。

ランチも終わり、くさくさした気分を一人で紛らわせようと、仲間から離れて特活室の裏あたりへ行った。

ここは日当たりがよく、あまり人が来ない。それに、卒業式に向けてプランタに植えられた花々が色とりどりに咲き誇り、とっても心が和む。今のオレにはぴったりの場所だった。

ところが、そこにはゆき子がいた。ひざを抱え、うつむき加減にじっとしている。

そして、彼女の手にはあのときのチョコレートが！オレの心臓は高鳴った。

「このままそっと引き返そうか、それとも……どうしよう」

と、心の中で迷っているそのとき、ゆき子が顔を上げた。

目にはいっぱい涙を浮かべ、悲しそうな表情でこちらを見た。オレの心がキーンと音を立てて鳴った。口は急に濁き、鼓動の音だけがポリウムを上げたラジオのように大きくなり、からだの中をこだまし始めた。

春を感じさせるうららかな日なのに、どういっわけか周りは暗く、オレとゆき子だけが光に包まれているかのようだ。まるで、闇に覆われた舞台の中央で、主役を演じる二人だけがスポットライトを浴びているかのようく。

こんなときは、なぜか急きたてられる。しかし、逸る心とは裏腹に、言葉はなかなか出てこない。一秒・二秒……、ゆき子は瞬きすら忘れたかのように、オレを見つめる。こつこつという場面では、

「つらいな。でも、その気持ちはお前もオレも同じさ」

と、額にしわを寄せて目を細め、憂いの表情をするか。それとも、

「がっかりするなよ。ヤツの人間性がわかったただけでもよかったぜ」

と言って、親友のごとく微笑むか。はたまた……？

だが、自分ですら自分を疑うおちゃらけが出て、「こつこつ言ったのだ。

「あつ、いいな。そのチョコレート美味しそうだな」

このハイトーンを聞いて、ゆき子の顔は歪んだ。その瞬間、一筋の涙がほおをつたって落ちた。

「バカ！」

鋭い語気とともに、チョコレートがオレをめがけて飛んできた。そして、意外にも静かな声で、

「あなたにあげる」と。

交わす言葉をなくした二人の間には、重苦しい沈黙だけが横たわっていた。オレは、居たたまれない気持ちに揺り動かされて、そつとその場を去った。

「ああ、オレはなんてバカなことを……」

ろつかを歩きながら、自己嫌悪に苛まれた。だけど、不思議なことにゆき子がオレを嫌いになっただけだ。むしろ、互いに好意以上のものを感じ取ったような気がする。

「こわって、オレのひとりよがり？」

その六

今日は、仏滅かしら？それとも、異教徒に迫害されて殉死した聖バレンタインの霊が祟っているのかしら。

ランチの時間にはなったけれど、とてもお昼を食べる気分じゃないので、

「頭、痛い。保健室行くね」

って、仲良しグループに言い訳して歩き出したんです。

みんなは心配そうに私を見つめ、

「だいじょうぶ？いっしょに付いていこうか」と、声をかけてくれました。しかし、黙って首を振り、そのままトボトボと歩きつづけました。

三年生が生活している二階のろつかには、高校のポスターがいくつも貼ってあり、どれも明るく屈託のない笑顔で語り合う人たちで埋め尽くされてた。これが、私の心を逆なでし、イライラ感をつのらせました。

いつもは何気なく通っているろつかだけれど、こんなにみじめな気持ちで歩くのは初めての経験でした。

それから、どこをどう通って来たのかわからないけれど、気がつくとも校舎裏に来てた。ここには、障害児学級の人たちが手入れをしている花々がプランタに植えられ、きれいに並べられている。どの

花も今や春遅しと出番を待っているようでした。

こうして花々を眺めていると、のどかで平和そのもの。傷ついた心も少しずつ癒されるようだが、でも、抱えたひざに額を乗せて目を閉じると、さっきのことが自然と浮かんできました。

「私、どう話せばいいの？どう説明すればわかってくれるの？」

去年までは、いつも兄さんに相談してました。だけど、今はそれもできない。

あるとき、兄さんに頼ってばかりの私の人生、これからはもっとしっかりなきゃと自分で決めたくは。もう兄さんのこと考えないようにしようと思いをたてたのに…。つい、くじけそうになって、兄さんのこと思ったら、涙があふれてきちゃいました。

雲の上に想いを馳せ顔を上げると、いつの間に来たのか、そこには哲哉がちゃっかりいました。眉を八の字にして目を細め、無意識なんでしょうか口を少し開けている。笑っているような悲しんでいるような、それでいて寂しさがにじんでいるような表情をしている。

突然やってきた哲哉を見ても、私の心は不思議と落ち着いていました。こういうときには、なぜか遠巻きにして哲哉が私を見守っていてくれる気がしたから…。

ただ、いつもは飄々としている哲哉なんです、さっきのことは堪えた感じに見えました。

ここは、神様が、否、聖バレンタインが私にくれたチャンスですから、何か言わなきゃと思いましたが。

そつだ！

「黒田くんとは、お話友だちになりたくて…」

では、私の気持ちをうまくまとめられないわ。 それなら、

「幼馴染の哲哉のことだから、きっと私の気持ちをわかってくれるよね」

これじゃ、誤解するわ。

やっぱり、自分の気持ちを素直に話すのは難しい。

そう思って、哲哉の方に顔を向けました。そのとき、哲哉はいきなり額にしわを寄せ、目を大きく見開いて、

「あっ、いいな。そのチョコレート美味しそう」

その調子はずれの言葉を聞いて、私の心の戸隅で静かに出番を待っていた素直な思いやりが、くると向きを変えて去ってしまいました。

それと同時に、下まぶたがふるえ、スッと涙の糸が頬をつたったのを感じました。

これまで、兄とは正反対の哲哉のなぐさめ方に同じやさしさを感じていたのに、このひと言は蔑、いや別！

衝動的に手に持っているものを哲哉に投げつけました。投げた後で、それがあのとときのチョコだったことに気づいたんです。

その後は、頭が混乱して何をしゃべったのか憶えていないけれど…。

その七

午後からの授業は、退屈だった。運動場側の一番後ろの座席で、ただボーとサッカーの様子を眺めながら、昼放課のできごとを思い返していた。

そのとき不意に、例の手紙のことを思い出した。そして、ポケットを探り、手紙を取り出した。開いてみると、几帳面なゆき子の字がきれいに並んでいる。これが、オレへの手紙だったらという思いが一瞬頭をよぎった。

オレは、手紙を読むにつれ紅潮した。なぜなら、その手紙にはあやしい口説き文句が羅列されているとばかり思っていたが、そうではなく、ヤツの勉強や運動への前向きな姿勢に感動し、どうすればそうなれるか知りたいという素直な憧れが書かれていただけだったからだ。

そういえば、ヤツは去年亡くなった彼女の兄を思わせる雰囲気だ……！今も忘れられずに苦惱している彼女の心が、手紙の行間から伝わってきた。

ここにきて、やっとゆき子の気持ちに気づき、オレは心の中で叫んだ。

「バカヤロー！」

清く澄んだゆき子の心の内を知り、彼女への思いが抑えがたいほど膨らんだ。

「ああ、何とかこの気持ちを伝えたい」

切なさという言葉はわかっていたが、その意味を初めて理解したような気がする。

こうなると、時の流れがまどろっこしい。先公が酸素不足の金魚のように、口をパクパク開けているが、シャッターが降りて密室状態になっているオレの頭には何も届かない。ジリジリしながら、羊を一匹・二匹……と、もう百十四まで数えたときに、一日の終わりを告げるチャイムがなった。

神は時としてシヤレている。もう一一四だなんて。

元氣いっぱいのおれは、

「さあ、告るぞー!」

と心に決め、用具をカバンに入れ始めた。

すると、いつもとは違った手触りだ。

「何だろう、これは?」

そっと机から出してみると、それは真っ赤なアーモンドチョコの箱だった。あわてて、それをカバンに押し込み、急いで教室を出た。ここに至って、心に迷いが生じた。先にゆき子に告るべきか、それともチョコの送り主を見るべきかと。

ほんの少しの間だが、

「オレって、モテるかも?」

と、思ったりもして…。

結局、ゆき子の教室へと足を向けた。すると、ろうか側の窓から、正門を出て一人で家路に向かう

ゆき子の姿を発見した。

大急ぎで後を追った。ちょうどゆき子が正ノ木小学校の手前にある公園の横を通って帰ろうとするところに追いついた。

公園の中では、小さい子が母親と遊んでいた。

「待って!」

ゆき子は立ち止まり、オレの方を振り向いた。もう涙のあとはなく、微笑んでいるような、それでいて悲しみがどこかに残っているような複雑な表情をしていた。

「今日はゴメン。ひと言謝りたくて」

心が決まっているせいか、言葉は滑らかに出了。ゆき子は、やや首をかしげ、二回ほど振った。オレは、彼女が何か言ってくれるのを期待したが、それは空しい願いだっただ。

ゆき子を包む空気には、ちょっぴり哀愁を感じさせるものがあり、告白しようとするオレの決意をためらわせた。しかし、

「ここだ！いま言わなきゃ。フレー、フレー哲哉」

と、後押しするもう一人の自分がいた。

「よしっ、言おう！」

と、決めた瞬間から、また固まった。

本来、胸にあるはずの心臓が頭の中で拍動するような、体温よりも冷たいはずの耳たぶが高熱を発するような異常事態に見舞われ、パニックに陥った。

それでも、大きく深呼吸をして、

「あ、あの、オレ、ゆき子のオコことが、す、好きなんだ！」と告白した。

そして、

「だから、だからあ、付き合ってほしい。えーっと、…。今日、どうしてもオレこれだけは言いたくて」

トツトツとした調子で伝えた。

オレは返事を待った。だが、ゆき子は黙ったままだ。その時間が、オレにはとても長く感じられた。

突然、足下に目をやっていたゆき子が顔を上げた。太陽の光を受け、透き通るような白いほおにキラキラ輝く茶褐色のきれいな目がオレを捉えた。そして、

「ごめんなさい。今は哲哉のこと、何も言えなくて…」

「あっ!」

またしても、早とちりをしてしまった。

「ゆき子の今の気持ちを、一番察することができるのはオレなのに…。どうして気づかなかったんだろっ」

自分のことしか考えられない浅はかさに、オレは腹が立った。

やるせない気持ちでいっぱいになり、ただ「ポーツ」と、その場に立ち尽くしていた。遠くでブ

ランコの揺れる音が聞こえた。

その八

わたし、五時間目の国語は、本当に頭がズキンズキンして耐えられませんでした。よっぽど教科担任の古河先生に申し出て、保健室へ行くこうかと思いましたが、でも、有里たち仲良しグループが私を心配して、授業中に手紙を回してきたの。それを開いてみると、特徴のある丸文字で、

「今日はコメンネ。それにしても、哲哉が何かやりそうで心配!まあ、そっちは私たちに任せておいて。早くいつものゆき子の笑顔が見たいな。それじゃ、SEE YOU」

と、書いてありました。

有里たちの友情と思いやり(?)に感激し、

「これくらいの痛みに負けてどうするの。親友に心配はかけられないわ」

と、自分を励ました。

とにかく、気を紛らわせようと先生の言葉に耳を傾けたんです。

三年生は、ちょうど卒業を目前に控え、谷川俊太郎さんの『春に』という詩を学んでいるところでした。詩の中には、

「この気もちはなんだろう 声にならないさけびとなってこみあげる この気もちはなんだろう」とあり、先生は詩から感じ取ってほしいことを、こう表現されました。

「春が来ると、すべての生き物は動き出しくなる。人間もそうでしょ。大地のエネルギーをもらって、ほら、動き出すのよ、こんなふうに」

と言って、盆踊りのようなわけの分からない踊りを始められました。踊りながら、さらに、

「春は、人間に恋のエネルギーも与えるのよ」と、微笑みながら付け加えられました。

この言葉を聞き、心で複雑に絡みあっていた糸が、少しずつほどけてきたように感じたのは、私の単なる思い過ごし？

今日のできごとを、もう一度じっくり振り返った方がいいと思ったそのときにチャイムが鳴り、みんなはそそくさと帰り支度を始めました。私の思考も、この雰囲気ですべて途切れてしまいました。

手短に帰りの会を終えた私たちのクラスは、すぐに解散しました。有里が来て、

「いつしよに帰る。」って、誘ってくれたけど、一人で考えたいことがあるからと言って断り、すぐに教室を出たんです。

学校近くの正ノ木公園を横切って帰ろうとしていると、哲哉の声がしました。立ち止まり、振り返ると、公園の入り口あたりを彼が走って近づいてきました。

昼放課とは打って変わって、眉が凜々しくつり上がった。いつものにやけた感じはなく、何かを決意している顔つきでした。

今度は、

「あっ、いいな。そのチョコ…」のようなズッコケはないと直感したけど…。

哲哉と向き合つと、彼のかもし出す緊張感が伝わってきて、徐々に息苦しさのような、なだらかな興奮が自然と私を包み、視線を合わせているのがつらくなりました。ちょうど、オーディションの結果発表を聞くときの心境と同じですね。

哲哉は、最初に謝ったきりで、あとは視線を上げ下げしたり、生つばを飲み込んだりしてる。何かを言おうとしてましたが、ためらっているようでした。まるで、自分の罪を母親に告白しようとする純粋な少年の仕草に似てる。

私は、待ちました。

雲に隠れていた太陽が表れ、光がスーツと差し始めると、哲也は何かに導かれたように話し始めました。彼の告白を聞き、

「好き…」

という言葉が、私の心を揺さぶりました。

とても大切な宝物を見せられた気がして、いいかげんな返事はできないなと思いました。

だから、感じたことをそのまま伝えただけ、なぜか哲哉は驚いてた。

とにかく、家に帰って自分の心を整理しようと思い、その場を立ち去りました。

哲哉と別れた後で、有里たちにもらった手紙のことをふと思い出しました。手紙の中に書いてあった、

「あの任せておいて！は、どういつ意味だろう？」

また、目に見えない不安が私の近くに忍び寄っている気がしました。

その九

正ノ公園での告白後は、どうやって家に帰ったのかまるで記憶にない。しかし、気付くと二階の自分の部屋でベッドに横たわっていた。これでは、まるで夢遊病者のようだ自嘲した。

窓の外を眺めてみると、いつのまにか夕闇だった。母親が二階に上がる階段の途中まで来て、

「夕食よー。はやく下りていらっしやい」と声をかけてくれた。

「ウン、わかった」

と、返事だけはしたが、下へ降りていく気にはなれなかった。

オレは、寝たまま後ろ手を組んで天井を見ながら、頭の中で記憶というビデオテープを巻き戻し、

例の場面を再現しては、

「ああ言えばよかった。こうすべきだった」

と、後悔する作業を繰り返した。こうやって早とちりをした自分を責めることが、どういっわけか、

ゆき子への罪滅ぼしになると考えたのだ。

何回目かの再現のとき、ふとゆき子のチョコと手紙を思い出した。すぐに起き上がり、その二つをカバンから出そうとした。

そのとき、もう一つの真っ赤な箱が目にとまった。途切れた記憶の糸は、すぐにつながり、

「あつ、あのときのチョコか。誰がくれたんだろう?」

と、手に取った。

急にわくわくするこそばゆい気持ちが生えた。そして、ゆっくりとチョコを開封した。しかし、

箱の中にはチョコはなく、二つ折りにした厚紙が入っただけだった。

「あれっ、何だ?」

ひとり言をつぶやきながら、その二つ折りを開けてみた。そこには、女子がよく書く丸文字で大きく、

「バーカ!」

と、書いてあった。オレは青ざめた。追い打ちをかけるような大ショックだった。

「あいつらだ」

オレの嫌いなヤツにチョコを渡し損ねたあいつらの仕業に違いない。

だが、証拠がない。仕返しを練る気力もなく、チョコの空箱を両手でねじりつぶし踏みつけて、

精一杯の憂さを晴らしをした。

その十

家に帰ると母がいました。二階の部屋に急いで行くところとすると、

「あらっ、今日は元気がないね。どつかしたの?」

と、顔色をつかがってきました。

「別に。ちょっと疲れちゃったかな。受験生だもん」

母の心配をさりげなくかわして、階段をトントントンと駆け上がりました。

そして、着替えを済ませ、机に向かおうとしたとき、ケイタイから夜想曲が流れました。

「あっ、たぶん有里からのメールだわ」

メル友の少ない私にとっては、着信音を聞いただけで相手がだれなのかを予想できるんです。すぐ
に開いてみると、やっぱりそうでした。有里です。今日は、けっこう長いメッセージが入ってしま
した。

まず、

『伊勢川台風注意情報！』

というタイトルにつづいて、こんなことが…。

「あのね、帰るとき男子たちに聞いたんだけど。哲哉さあ、ゆき子のが好きなんだって。オドロ
きー。ぜつたい、今日のことやケになってる。台風荒れるかも？まさか、告られてないよね。返
事ください。あっ、それから、ヤツにはお仕置きしといたから。ルンルン！」

有里のメールを読んで、私の頭の中が嵐と化した気分です。とりわけ、哲哉が私のことを好きだ
ということが、有里たちに知れ渡ったこと。これでは、もうクラスじゅうのうわさになることまちがい
なしだわ。

それに、あの告られたかどうかの質問だけど、どついでに返事しようかしら。

うそはつきたくないし、告られたと言えなきゃと哲哉をからかうネタに使われるし、そうなること、それをしゃべった私を哲哉がどう思うか、想像しただけで寒気がするわ。

そんなことより、最後のお仕置きって何だろう？

言葉から想像すると、不良グループが哲哉を袋叩きに行っているイメージがわいたけど、まさか有里たちがそんなこと頼むわけないし…。

いつもは哲哉たちにいたずらをされると、

「ほんとに、もう、やられる側の気持ちを考えてよね。許せないわ」と、口々に言い合っていたのに。今度のことはどうなんだろう。お仕置きの中身は分からないけれど、何かすごいことをされ、落ち込んでいる哲哉がまぶたに浮かんできます。

「ああ、ちょっとぴりかわいそう」

ぼんやりと、そんなことを思いながら、ふと我に返ると、最も難しい課題を避けている自分に気づきました。

黒田くんの誤解、そして哲哉のこと。真正面から向かい合って結論を出そうとしたら、ドアをノックする音が聞こえました。

「ハイ」

と、返事をする、母がドアを少し開け、顔だけを出して、

「いっ飯よ。さっきから呼んでるのに、今日はどうしたの？」

と、小言を言いました。

「勉強に集中してたから聞こえなかった」

と、咄嗟に言い訳をしました。

夕食は、ご馳走でした。今日は母が父に交際を申し込んだ記念日なのだそうで、いつも以上に和やかな雰囲気でした。お父さんは、ビールを飲みながら、から揚げをほおぼって、

「うまい、うまい」

を連発していました。

そんな中、突然父が、

「ゆき子は、チヨコをだれにあげたんだい？」と質問してきました。虚をつかれた私は、戸惑いながらも、

「えっ、それは…、ひみつ」

と、答えました。

私のぎこちない受け答えに、聞いてはまずいことを聞いてしまったと父は読み取ったのか、今度はニヤリとして、

「父さんの分は？」

と聞き、大笑いをしました。でも、その後でしんみりとした口調で、

「圭一朗に供えてあげない」

と、言いました。

食後に父はテレビのドラマを観ながら、コクリコクリと居眠りを始めました。母は台所で後片付け

をしていました。

私は部屋に戻った後、とっておきのチョコを持って仏間に行きました。ここは、わが家では一番西奥にあり、静かな場所です。

私は、仏壇の前に正座してチョコを供えました。そして、一度兄の写真を見て、手を合わせました。いつに変わらぬ兄の笑顔が私を迎えてくれて、何やらホツとしました。

目を閉じていると、自然と今日のできごとが浮かんできました。暗闇の中から兄の顔が、つづいて哲哉・黒田くんの順で浮かんで消えていきました。それぞれの顔は笑顔だけれど、何も語りかけてはくれません。本当は、だれかのアドバイスがほしいのに…。

どれくらい座っていたのかわからないけれど、突然もう一人の自分が語りかけてきました。

「今のままじゃいけないの？」

この問いにはびっくりしました。私的には、「こういうとき、何かをして収めるのが常識だと思っ
たましたから。」

「今までまじめにやってきたんでしょ？」

そう言われれば、確かにそうです。

「それなら、このままでいいじゃない。自然体よ、それが一番！」

妙に説得力のあるお言葉が、私に迫ってきました。でも、これって哲哉の言いそうなことだわ。

そんなことを考えていたら、正座の足が悲鳴をあげ始めました。私は、

「自然体、これが一番か」

とつぶやき、目を開けました。

写真の兄がうなずいたような気がして、

「お兄ちゃん」

と、呼びかけました。

まとめ

翌朝は、快晴。

落ち込んだまま家を出ると、いつもの習慣とはいえ、そこにはゆき子がいた。オレは彼女を見た瞬間、心にわだかまりがムクムクと頭をもたげるのを感じた。

「オイ、何て声かけりゃいいんだよ。もう、どうにでもなれ！」

という気分で彼女の顔を見た。

すると、ゆき子の方から、

「おはよう！」

と、まぶしいくらいの笑顔であいさつする。オレは、いじけた気分で

「おはよう！」

と返す。ゆき子は、いきなりフツツと笑いかけ、こんなことを。

「私、あれから考えたの。そして、こう思った。哲哉のこと嫌いじゃないって。それから、今まで通りに話したり、一緒に学校行ったりするのが付き合っことじゃないかって」

憂鬱な気分はいっぺんで吹き飛んだ。というよりも、最高だった。オレは、小さくガッツポーズを

作って、つい小声で

「最高！」

と言った。それが聞こえたのか、ゆき子は微笑んで、

「何か言った？」

と聞いた。オレはすかさず、

「さあ、行こう。急がないと学校に遅刻するぞ」

と、笑顔で語りかけた。

恋に不慣れな少年と少女のバレンタインエピソードでした。

